

4. 未熟児網膜症に関する研究

② Ⅱ型網膜症の今後の発生状況について 最近の未熟児網膜症による失明の動向

東京都心身障害者福祉センター
原 田 政 美

研究目的

過去10年間以上にわたる未熟児網膜症による視覚障害幼児の実態と最近の動向を明らかにし、療育上の問題点を検討する。

研究方法

東京都心身障害者福祉センター（以下センターと略す）に來所した視覚障害幼児を対象とし、各年度別の発生状況、心身の発達状況などを原因疾患別に調査するとともに、特に未熟児網膜症による視覚障害幼児の特性に関し詳しく検討する。

研究結果

センターは昭和43年4月に開設された。その当時は、昭和39年度（4月から翌年3月まで）に出生した幼児が最年長であった。未熟児網膜症による視覚障害幼児で來所したものの実数は、昭和52年度出生のものまでで総計217名となる。これを、生年度別および生下時体重別に分類すると表1のようになる。

ここでいう視覚障害幼児とは、両眼ともに回復不能な視覚障害があるため日常生活にかなりの不自由を伴うもので、視力でいえば0.04程度以下である（ただし例外的に0.2までのものを含む）。未熟児網膜症によるものは、その67%が全盲または光覚である。

センターには東京都民だけでなく近県の住民も來所する。表1および後述する数字はすべて、住所に関係なく來所したもの的人数である。したがって出現率は求め得ない。

表2は、昭和44年度にセンターに來所した視覚障害幼児83名の原因別内訳と、昭和50, 51, 52年の最近3年度間の平均数とを比較したものである。また昭和43年度から53年末までの総数と原因別内訳、各々の中で発達正常児の占める

割合、死亡した幼児の数などもこの表に掲げた。生年度別の発達正常児数は表1の最下段に再掲した。

光凝固または令凍手術を受けた未熟児網膜症の人数を表3に示す。昭和44年度までに出生した幼児では手術を受けたものがないが、最近では過半数が何らかの手術を受けている。

考 察

未熟児網膜症による視覚障害幼児の発生は、表1にみられるように、昭和45年度出生をピークとして漸減傾向にあることは確かである。とくに生下時体重1,500g以上においてその傾向が強い。昭和49年度以降は1,000g前後のものに数名発生しているのにすぎないが、この年度以降の出生児はこれからセンターを訪れるものがあるかも知れず、実数は多少増加することが予想される。しかしセンターに來所する年齢としては、2歳までに61%、4歳までに92%が來所するので、今後増加するとしてもそれほど多くはないと思われる。

表2の原因疾患別の数によれば、最も多いのが未熟児網膜症であるが、昭和44年度來所数30に対し、最近3年間の平均は11と激減している。未熟児網膜症以外の原因によるものの数はこの10年間ほとんど変わっていないので、最近では上位疾患の間にはそれほど大きな差はなくなってきている。なお、都内盲学校児童の調査統計では、昭和43年度に1位小眼球116名、9位未熟児網膜症21名であったものが、53年度では1位未熟児網膜症111名となり、学齢児レベルでは現在が最も多い時期となっている。

次に未熟児網膜症では発達の遅れを示すものがきわめて多く、てんかんや脳性麻痺などの合併もみられる。表2にみられるように発達が正常と評

価できるのは総数217名の31%程度にすぎない。また表1最下段にみられるように、最近ではその傾向がさらに著明となり発達正常児がきわめて稀となった。死亡は昭和43年度以来僅か1名である。これは意外に少ない数である。何故ならば、未熟児網膜症幼児217名のうち重度の発達遅滞を示すものは48名であり、この種の子どもは2～3歳頃に年間5%程度の死亡傾向がみられるのが普通だからである。生下時体重1,000g前後の未熟児でも救命された場合には、その生命力は意外に強いことがわかる。

発達正常児が少ないことは他の原因疾患においてもみられる。もちろん網膜芽細胞種などは別であるが、先天性白内障や小眼球のような先天異常がほぼ同じ数字を示しているのは興味深い。視神経萎縮は脳障害と関係することが多いためと思われるが、死亡3名と最高である。

光凝固または冷凍手術を受けた幼児数は、表3のように昭和48年度出生児から増加してきている。特に最近では、過半数が何らかの手術を受け

ていることは注目に値する。また光凝固と冷凍手術の併用も多くなっている。これらが何を意味するかは、今後の検討を待つべきであろう。

要 約

未熟児網膜症による視覚障害幼児の発生は、昭和45年度出生児をピークにして漸減傾向にあり、昭和49年度以降は生下時体重1,000g前後のものに数名発生している程度である。

視覚障害の原因疾患別の統計によれば、未熟児網膜症以外のものは発生数がこの数年間横ばいであるから、全視覚障害幼児の数は未熟児網膜症の漸減傾向とともに漸減している。

未熟児網膜症では発達の遅れを示すものがきわめて多く、特に最近ではその傾向が著しい。しかし死亡数は意外に少なく、これまでに1名が死亡した程度である。

光凝固(または冷凍手術)は昭和45年(48年)頃から普及し始めたが、特に最近では過半数が何らかの手術を受け、両法の併用も多くなっている。

表1 未熟児網膜症による視覚障害幼児の生年度別および生下時体重別の実数
(最下段カッコ内は発達正常児数の再掲)

生年度 体重	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	計
<1,000g				2	1		4	4	2	3	3	3	2		22
<1,100g	1	2	1	2	5	1	3	2	2	4	3	1	3	1	31
<1,200g	2	3	1	3	3	3	4	2	3	2	2				28
<1,300g	2		3	4	5	4	2	7	2	2		2			33
<1,400g	1	1	6	2	5	2	6	2	4	2			2		33
<1,500g		1	6	5	2		1	4	2	1				1	23
<2,000g	3	2	1	1	2	6	6	2	3	4		1			31
<2,500g					2		1		3						8
不明		2			1	2	3								8
計	9	11	18	19	26	18	30	23	21	18	8	7	7	2	217
(発達正常)	(4)	(4)	(9)	(6)	(11)	(7)	(6)	(8)	(4)	(4)	(4)	(0)	(1)	(0)	(68)

表2 視覚障害の原因疾患別のセンター来所数と
 発達正常および死亡数
 (年度はセンター来所年度)

年度 原因	昭44	昭50～52 3年間平均	昭43～53年末	発達正常	死亡数
未熟児網膜症	30	11	217	31%	1
先天性白内障	8	7	62	31%	
視神経萎縮	11	4	61	13%	3
小眼球	5	4	49	29%	1
先天性緑内障	4	3	29	51%	
網膜芽細胞腫	2	2	25	64%	
その他	23	15	122	23%	2
計	83	46	565	30%	7

表3 光凝固または冷凍手術を受けた
 未熟児網膜症幼児の人数

生年度(総数)	光凝固	冷凍	併用	計
昭44以前(111)	0	0	0	0
45(30)	2	0	0	2
46(23)	2	0	0	2
47(21)	2	0	0	2
48(8)	4	1	0	5
49(8)	2	1	1	4
50(7)	3	0	1	4
51(7)	4	0	2	6
52(2)	1	0	1	2

↓ 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究目的

過去 10 年間以上にわたる未熟児網膜症による視覚障害幼児の実態と最近の動向を明らかにし、療育上の問題点を検討する。